
大伴家持「雪の上に照れる月夜に梅の花」(巻18・4134)における 「雪月花」の定位

Localization of "Snow Moon Flower" in Ōtomo no Yakamochi's "Plum Blossoms on a Moonlight Night Shine on the Snow" (Vol. 18-4134)

吉村 誠*

YOSHIMURA Makoto*

(摘要)

和歌文学の主題の一つに雪月花詠がある。『万葉集』大伴家持歌(巻18・4134)に初めて雪月梅花が一首の中に詠まれているので、この雪月花詠の先駆という解釈が多くある。しかし万葉時代は月は明るいという意味に用いられるのが一般的であり、雪を照らした月の明るさで梅花を娘に贈るという解釈が出来、雪月梅花が一連のものとして詠まれているわけではない。従って万葉歌はまだ雪月花詠とは言えなく、平安時代漢詩文を背景とした、月光を白いと認識して雪に照り映える花という表現が確立して、雪月花詠が成立したと見なければならぬ。

キーワード：和歌文学、雪月花、万葉集、平安時代、中国文学

(Abstract)

One of the themes of waka literature is the snow moon flower poems. Since the snow moon plum blossom is first chanted in the Ōtomo no yakamochi's poems of Man'yō shū book (vol. 18, 4134), there are many interpretations that it is a forerunner of this snow moon flower poems. However, in the Man'yō period, it is common to use the moon to mean bright, and it can be interpreted that plum blossoms are given to girls based on the brightness of the moon illuminated by snow, but the snow moon plum blossoms are not chanted as a series of things. Therefore, the Man'yō Poems cannot yet be said to be snow moon flower poems, but it must be seen that the expression "flowers that shine in the snow by recognizing the moonlight as white" was established against the background of the Heian period Chinese poetry texts, and the snow moon flower poems was established.

Keywords: waka literature, the snow moon flower poems., Man'yō shū, Heian period., Chinese poetry

1. はじめに

宴席詠雪月梅花歌一首

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむはし
き子もがも (巻18・4134)

右一首一二月大伴宿禰家持作

この歌は題詞、左注と前後の歌の配列から、大伴家持が越中守時代の「天平勝宝元年一二月」に宴席において詠まれたものであると知られるものである。しか

* 山口大学名誉教授

Journal of East Asian Identities Vol. 8 March 2023 (pp. 21-27)

し 12 月とあるので、まだ梅の花は咲いていなく、宴席での見立てであると思われる。

問題なのは、題詞にあるようにこの歌は雪月梅花の 3 種の景物を詠み込んでおり、いわゆる後世の和歌文学の主題の一つである「雪月花詠」となっていることであり、その先駆であるという見方が強い¹。しかし『万葉集』ではこの歌一首だけであり、またこの歌の解釈をめぐるには不明な点が多いので、「雪」「月」「花」は詠まれているものの、この 3 つが内容的につながっているものを「雪月花詠」と定義するならば、単純に「雪月花詠」と考えてよいかどうかは疑問である。特に「月」をめぐる「白色」とみて梅花への連想があるのか、「明るい」夜という意味で「贈る」という発想の契機になっているのかということによって「雪月花詠」と見做してよいか意見が分かれる。

そこで、本稿では「照れる月」の光の内容を中心に、この歌を雪月花の先駆とみていいのか、あるいはその意識はまだないのかを考えてみたい。

2. 題詞と左注

題詞には「雪月梅花」と歌の題材が明示されており、3 種類の景物を詠んだとある。ここから見ると宴席において「雪月花」を主題として詠まれたと理解出来る。しかし場所が示されていない。ただ「宴席」とあり、歌に詠まれた題材が示されているだけである。また左注は詠まれた月と作者名のみが略述されているという簡単な書式である。

このような題詞、左注の性格について、早くに阿蘇瑞枝氏が取り上げられ²、またそれを受けて芳賀紀雄氏が詳細に論じられた³。阿蘇瑞枝氏は、その著『万葉集全歌講義』にも略述されているが、宴席歌においては場所よりも詠まれた時期が重視される傾向があるので、後に残された歌資料の中で詠まれた場のみが編纂時に記されたと説かれる。

芳賀氏は阿蘇論に加えて、予作歌や儲作歌とは異なること。従来の諸注が触れているが、題詠であるにしても、異種の題材をつなぐ所に興味のある物名歌の性格とは異なり、記憶を頼りに題詞、左注は記載されているとされた。詳細に考察されており諸うことの出来る論である。

とすると、題詞の歌題は歌の中の詠まれている物から後に掲げられたということになる。宴席当初においては、囁目の景を見たまま詠んだということであり、梅の木に雪が積もっている様子を梅の花と見立てたも

のである。雪と梅の関係は後述するが、雪が降り積もって月明かりで見える梅の木の風趣をそのまま表現したものであろう。

3. 3 つの景物の構成

この 3 つの景物の構成について、佐藤隆氏が綿密な考察を行われている⁴。佐藤氏は芳賀氏などの先行研究を考慮しながら、梅の花弁が月に照らされて白くかがやく美的な情緒に共通点を見出され、「雪」も交えた「白」の美しさを強調した風景であるとされる。

しかし問題となるのは、2 句目のかかる句である。この歌の構成をよく見ると、伊藤博『万葉集釋注』が指摘するように上 1、2 句は、4、5 句目にかかっている。「月夜に」であるので連用修飾句であり、「折りて贈らむ」に続いていると見なければならぬ。従って「梅の花」は「雪」「月」とは歌の構成上一連のものではないことになる。

また上 1、2 句は、雪の白さと輝く月で「白」の世界が広がっているとも受け止められるものの、「月」の光が「白い」という表現は『万葉集』に見ることは出来ない。後述するように「清い」か「明るい」という表現である。従って月夜の「明るさ」で「贈る」という意味に解するのが自然であろう。多くの注釈書の口語訳はこの関係は曖昧である。窪田空穂『万葉集評釈』のように、

雪の上に、月の照っているこのような夜に、そこに咲いている梅の花を、折って贈ろう とする可愛い女が欲しいものだなあ

という意味に解釈すると、「そこに」というのは、梅の花が雪と月の風景の中に咲いていると理解出来、雪月花が一連のものとしてとらえられている。

その部分を強調して再度口語訳すると、

雪の上に月が照っていて、雪の積もった庭の梅の木がまるで花が咲いているように白く映える。そんな梅の花を手折って贈るいとしい女の子がいればなあ。

ということになる。

しかし、阿蘇瑞枝『万葉集全歌講義』は、5 句目を「送らむ」と訓読の文字を表記して

雪の上に月の照り映えているこの夜に、梅の花を折って送るような愛らしい娘がいればよいのだが・・・

と口語訳しており、夜の風光と梅の花とは切り離され

て、花はこの月明かりの中で遠くの娘集に送るものとして詠まれていると解釈出来る。

この解釈をもう少し詳しく口語訳すると

雪の上に月が照らしていて明るい。雪が積もって花が咲いているように見える梅の花をそんな明るい夜に手折って送るいとしい女の子がいればなあ。

ということになり、「月夜」が「白く輝く」のではなく、「明るく照る」という意味になる。

これは4、5句が、土屋文明『万葉集私注』などが言うように、蛇足的な慣例のように見えることからの反論であり、伊藤博他『新潮古典集成』が言うように、以下の歌を想定しての構造を持っている。

大伴家持石竹花歌一首

我が宿のなでしこの花盛りなり手折りて一目見せむ子もがも(巻8・1496)

(難波経宿明日還来之時歌一首并短歌) 反歌

い行き逢ひの坂のふもとに咲きををる桜の花を見せむ子もがも(巻9・1752)

(右伴歌者高橋連蟲麻呂歌集中出)

この2首の歌は、それぞれ花を子(娘子)に見せたという発想から詠まれているものであり、その直前に花の状態の形容がある。その点を見ると当該歌は1、2句から「梅の花」を連想し、その結果「梅の花」にかかっているように見える。しかし1、2句は「に(原文「尔」)」とあり、連用修飾句となっており動詞にかかると見るのが自然であろう。従って「梅の花」にかかると見るよりも「贈る」にかかると考えなければならない。梅の花を贈って見せるということに歌の中心があると見られる。

しかし上1、2句が4、5句にかかるとした『万葉集釋注』も同時に「雪月花」の風趣の中で説こうとしているように、宴の場で雪に反映される月明かりの中で枝に積もっている梅の木に花が咲いていると見立てたというとらえ方も風趣として否定は出来ない。そうした点で佐藤氏の詳論を代表として、従来論には3つの組み合わせを詠んだことは家持の新しい発見であるとされる旨もあるが、万葉集中他に「月」が「雪」「梅」と組み合わせられた例はなく、この1例のみであり、歌の構成に疑問がある限り単純に言えるかどうかは疑問である。また月光が「白い」とする光景は『万葉集』にはない。そこで次に月光について俯瞰する。

4. 万葉集の「月」

「月」は「明るい」、「清らか」の表現はあるが、「白」

は見られない。夜道を歩く時の明かりを表現したものが主であり、以下の歌が掲げられる。

湯原王歌一首

①月詠の光りに来ませあしひきの山きへなりて遠からなくに(巻4・6709)

豊前國娘子大宅女の歌一首 未審姓氏

②夕闇は道たづたづし月待ちて行ませ我が背子その間にも見む(巻4・709)

①は、女が男の通ってくるのを待つ歌と見られるが、湯原王と題詞にあるので、宴の参加者への誘い歌を女の立場で詠んだものと考えられる。また②は夕方に立ち去ろうとする男に月明かりを待って行きなさいと言っている歌である。歌の前後の配列が大伴家持関連の女性の歌であるので、遊行女婦が家持に対して詠んだものという解釈が行われている。

このように多くは相関的な内容で、夜道の明かりとして月は詠まれているが、花との組み合わせもある。

紀女郎歌一首 名曰小鹿也

闇ならばうべも来まさじ梅の花咲ける月夜に出でまさじとや(巻8・1452)

この歌の「闇ならば」は二重の意味を掛けている。闇夜であるならば道中心もとないが、月が出ているので通ってくることは出来るということと、梅の花が咲いている月夜の美景を見に来るのが当然であるのになんか来れないという理由で相手をなじった言い方になっている。ここで注意すべきは月に照らされる梅の花の意識があることである。

また次の歌も月夜と梅の対比がなされている。

紀少鹿女郎歌一首

久方の月夜を清み梅の花心開けて我が思へる君(巻8・1661)

前歌と同じ作者であるが、月夜が清らかなので梅の花が開く。そのように心を開いて、打ち解けて自分が恋い思うあなたであるという意味で、心開けての序詞となっているが、この序詞の成り立つ基本には月と梅の花の組み合わせがある。

誰が園の梅の花ぞもひさかたの清き月夜にここだ散りくる(「詠花」巻10・2325)

「梅」と「月」の組み合わせは、実景を詠んだものである。白梅であるので月の光に照らされている様子がうかがわれる。「白」色も認識されるが、月は「清い」以上のことを表現していない。

(八月十三日在内南安殿肆宴歌二首)

秋風の吹き扱き敷ける花の庭清き月夜に見れど

飽かぬかも（巻 20・4453）

右一首兵部少輔從五位上大伴宿禰家持 未奏
肆宴歌として家持によって詠まれた宴席での歌である。「未奏」とあるので実際にその場で歌われたものでもないが、宴席における花と月の組み合わせが題材とされている。月に照らされる秋の花の美しさを賞美したものである。特にこの歌は月夜に照らされた花の敷き詰められた様子を歌うが、秋の花が何を指しているかわからない。白く際立つという光景よりも清らかな月の光に照らされている様子を歌う。

このように見てくると、月の明かりを中心に詠まれた歌が一般的であり、「清らか」や「明るさ」はあるが、「白」色を意識したものはない。

宮地敦子氏は、佐竹昭広氏などの「白」の語の解釈を引用されて、月が「白」と認識されるようになるのは、平安中期以降のこととされている⁵。

一方で「月」と「雪」の組み合わせは『万葉集』中には当該巻 18・4134 番歌以外は見られない。

5. 漢詩文における月

『懷風藻』には「月」は、30 例描かれているが、宴席を中心として季節は「暮春」であったり「秋」である。月の光や明るく輝く様の表現はあるが、「白」色でとらえるものはない。季節の景物として物色の対象として描かれ、比喩的な意味を持っている。

六朝詩文においては、「素月」「皎皎」という表現はあるが、季節は秋、または冬である。

『文選』では（「月賦」謝希逸）に

素月流天。

柔祇雪凝、圓靈水鏡。

愬皓月而長歌。

と表現されている。「素月」とは白い月。「柔祇雪凝」とは月に照らされた地面は雪のように白くなることであり、月の白さが示されている。「愬皓月」は、しらじらと照る月のことで、いずれも月やその光を「白い」と表現している。

他にも、

新裂齊紈素、皎潔如霜雪。裁為合歡扇、團團似明月。（「怨歌行」班婕妤 『文選』）

凝階似月夜、拂樹曉疑春。蕭散忽如盡、徘徊已復新。若逐微風起、誰言非玉塵。（梁何遜「詠雪」『藝文類聚』「雪部」）

班婕妤の「怨歌行」は、閨怨詩の部類であるが、月の「白」さは霜雪のようといっているのが、冬の月である。「皎」とは、月の光。月の白い色のことで、『説文解字』には「月之白也。人人白交臂」とある。月が白々と明るく照っている様子を表現する。梁の何遜の詩は、雪を表現するのに「月夜」に似ていると言っている。一面の雪の白さが月の夜の白さに譬える。

次の詩も同様の表現である。

平生無志意。少小嬰憂患。如何乘苦心。矧復值秋晏。皎皎天月明。弈弈河宿爛。（宋謝惠連「懷秋詩」『藝文類聚』「秋部」）

「白々と天の月は明るく」と表現する。このような月の光が白く照らすという表現は枚挙に暇がない。いずれも秋の月であったり、霜雪と密接に関係して表現されている。ただ多くは、班婕妤の「怨歌行」のように空房を月が照らすなど閨怨詩に多く出ている。

また次の詩は、雪月花の取り合わせの表現が見られる。

兔園標物序。驚時最是梅。銜霜當路發。映雪擬寒開。枝橫卻月觀。花繞凌風臺。知應早飄落。故逐上春來。（梁何遜「詠早梅詩」『藝文類聚』「梅部」）

霜雪の中で咲いた梅花への驚きを表した詩であり、早春の生命力を讃えた詩である。『万葉集』の早春の梅花詠と酷似する。しかしこの詩は早春とはいえ霜雪の中で孤高を保つ梅の花という描き方になっており、これは嚴冬の中で松や柏が緑を保つという他の中国詩と同様な観点とみなされ、冬から春の到来という季節の推移を詠む観点とは少し異なっている。

万葉歌と六朝詩の相違は、『文心雕龍』の「物色」編に見られるように、季節の風物に感応して詩作をするという詩論に形成されるように、季節の語を中心にそこから情を発露するという詩作の方法が一つの要因になっていると考えられる。「月」は秋や冬の景物であり、それが雪と呼応することにより「白」色の世界を醸しだし、そこから来る情念が歌われる。

それに対して万葉歌は月そのものの属性である明かりや清らかさに中心があり、雪を「白く」照らすという複合的な色彩の中でとらえるよりも、雪を照らし出す道具としてや、月明かりに視点があり、従って「白」色の表現はなされなかったと考えられる。

6. 雪と梅

一方で「雪」と「梅」は多く詠まれている。家持には「雪」と「山橋」を対象としている歌もあるが、万

葉集中一番多く見られるのは「雪」と「梅」の組み合わせである。この組み合わせを俯瞰してみると、

①花の散る様子を雪の降る光景と見る。

我が園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも 主人(巻5・822)

梅の花散らくはいづくしかすがにこの城の山に雪は降りつつ 大監伴氏百代(同・823)

春の野に霧立ちわたり降る雪と人の見るまで梅の花散る 筑前目田氏真上(同・839)

妹が家に雪かも降ると見るまでにここだもまがふ梅の花かも 小野氏國堅(同・844)

大伴旅人の梅花宴にまつわる歌である。旅人が一首目の歌を詠んだことを起点として、それに呼応する形で梅花の散る様子を雪の降る風景とみなしている。梅花は白梅であるので、雪への見立てとなるが、冬や初春の象徴としてある雪に見立てるのは、それまでの冬と春の相剋を示す歌の流れの中にあると見られる。

梅花宴に関連する歌以外にも、雪の降る様子を梅花が散る様子に見る歌は以下のようにある。

山高み降り来る雪を梅の花散りかも来ると思ひつるかも 一云 梅の花咲きかも散ると(「詠雪」巻10・1841)

実際に降ってくる雪を梅の花と「思った」ということであり、梅花宴のように雪の白さと梅の花の色とが近い関係にあることが基本となっている。

②春と冬の相剋を实景として描く。

我が背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れば(「山部赤人」巻8・1426)

明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ(「山部赤人」同・1427)

両者とも山部赤人の歌であるが、梅の花の開花時に雪が降っていて、春の到来と思っていた時期に冬の雪が降ると述べることで、花と雪の白さの共通点を踏まえながらまだ冬季から抜け出していない様子を述べる。

③冬から春への季節の推移の中で、白梅と雪の白色との関係で示す。

雪の色を奪ひて咲ける梅の花今盛りなり見む人もがも(「後追和梅歌」巻5・850)

梅花宴に追和したものであり想念的な内容であるが、梅花の白さを強調し、この佳景を人に見せたいという気持ちを表したものである。人に見せたいという気持

ちの基本には家持歌の「折りて贈る」につながるものがある。

④2つの関係がお互いに干渉して、雪が開花を即すと述べる。

含めりと言ひし梅が枝今朝降りし沫雪にあひて咲きぬらむかも(「大伴宿禰村上梅歌」巻8・1436)

今日降りし雪に競ひて我が宿の冬木の梅は花咲きにけり(「大伴宿禰家持雪梅歌」巻8・1649)

枝に積もった雪が梅花のように見えるというのではなく、降雪を契機として花が咲くと言ったものであり、冬から春への季節の推移の中で言ったものである。

⑤逆に雪が梅花を散らすととらえる。

沫雪のこのころ継ぎてかく降らば梅の初花散りか過ぎなむ(「大伴坂上郎女」巻8・1651)

言繁み相問はなくに梅の花雪にしをれてうつろはむかも(巻19・4282)

鶯の鳴きし垣内にはほへりし梅この雪にうつろふらむか(巻19・4287)

④とは逆に雪が梅花を散らすととらえる歌である。冬に戻るという様子をとらえる。

このように「雪」と「梅花」は、冬と春の相剋を基盤として、「白」色が主体となり、両者が密接な関係で詠まれる。この関係の直接的な組み合わせは中国詩文には見られない。中国詩文における「雪」の概念は別稿⁸で述べたとおり、厳寒、人間の行動を阻害するものとして描かれる。

このように見てくると「雪」と「梅花」との関係は冬から春への季節の推移を背景に「白」に共通性があり、白の世界を味わうように見えるが、「月」を含める形での「白」の概念はない。

冬木の積雪を梅花と見立てる発想は、このような雪と梅の和歌的世界からの発想であり、家持歌は、月が明るく照らしている庭で雪が白く照り映えて梅木に花が咲くと見立てたものであり、白との共通性は低いと思われる。

とするならば、「月」を「白い」と見る表現は、中国詩文にあっても秋や冬の月の光であり、『万葉集』にはまだないと見なければならぬ。家持の当該歌は雪月梅花が3点そろって「白」という発想の中で詠まれているとは言い難い。従って1、2句は「明るい」月夜の中の情景で梅花を贈りに行くという構図になっていると結論付けられる。

7. 平安時代の月と雪月花

平安時代は月光を「白」ととらえた例が多々存在する。鴻巣盛広『万葉集全釈』は、次の藤原公任の歌を引いて、雪月花の先駆をなすと解説する。

しらしらとしらけたる夜の月影に雪かきわけて
梅の花折る

『和漢朗詠集』の「白」の項目にある歌であるが、月の「白い」光の中で「雪」「梅の花」が配されており、全体が「白」の世界となっている。芳賀紀雄氏は、異本のあることを指摘し、『後撰集』に

我がやどの梅の初花昼は雪夜は月とも見えまが
ふかも（上26よみ人知らず）

のあるのを引いて雪月花詠の典型としている。

また『枕草子』にも次の用例があることが多く指摘されている。

村上の前帝の御時に、雪のいみじう降りたりけるを、様器に盛らせ給ひて、梅の花をさして、月のいと明かきに、「これに歌よめ。いかがいふべき」と、兵衛の蔵人に賜はせたりければ、「雪月花の時」と奏したりけるをこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌などよむは世の常なり。かくをりにあひたることなんいひがたき」とぞ仰せられける。（枕草子182段）

「月はいと明かき」とあるだけであるが、ここではすでに月の光を「白」ととらえて、雪と梅を配した「雪月花」と答えたのであろう。

芳賀氏をはじめ、すでに多くの注釈書が指摘している白居易の詩、

寄殷協律

五歳優遊同過日、一朝消散似浮雲。琴詩酒伴皆拋我、雪月花時最憶君。幾度聽雞歌白日、亦曾騎馬詠紅裙。吳娘暮雨蕭蕭曲、自別江南更不聞。（『白詩文集』卷55）

において、雪月花が明示されていて、それが平安時代の雪月花詠を促したと言われているが、とりわけ注意すべきは、これらの歌が「月」を白色としていることである。

他にも

色かへぬ竹の葉白く月さえて積らぬ雪を払ふ秋
かぜ（『古今和歌六帖』230）

いづれをかはなとはわかんなが月の有明の月に
まがふ白ぎく（『古来風体抄』2739）

夏の夜も涼しかりけり月影は庭白妙に霜と見え

つつ（同420 源頼綱）

などとある。雪月花詠ではないが、月を「白」色でとらえている歌である。1首目は緑の色から変化しない竹の葉も月の光で白く見えて雪のように見える。しかしその雪を秋風が払っているというものであり、2首目は白菊が有明の月の光に白く照らされる中でどれを花として区別すればよいのかという思いを詠んだ歌。いずれも秋の月を詠む。3首目は庭に照る月の白光が霜と見えて涼しく感じるという夏の歌である。

菅原道真は

月夜見梅華 干時年十一。厳君令田進士試之。

予始言詩。故載篇首。

月耀如晴雪、梅花似照星、可憐金鏡転、庭上玉房馨（菅家文章）

と月は雪のように白く輝きと明確に表現しているが、李白にも有名な、

静夜思（李白）

牀前看月光 疑是地上霜 舉頭望山月 低頭思故郷

があり、月光を霜ととらえて白さを強調し、また同じ李白の「古朗月行」に

小時不識月、呼作白玉盤。又疑瑤台鏡、飛在碧雲端。（李白『全唐詩』）

と歌って、幼い時の感覚として月を白の玉盤だと思っていた赴きを表現している。

これらは、「素月」「皎皎」と表現していた六朝詩からさらに「白」の具体相を表現したものとして位置付けられる。李白詩はいずれも初春の景色と花を配していないが、月光を白色と見るものであり、道真詩もそうした雰囲気の中で梅花と合わせて見た光景を詩にしたのであろう。

漢詩文との関係はもう少し考えてみなければならぬが、少なくとも、平安時代における和歌においては、雪月花の概念とともに月光を「白」と見る概念が成立したと考えられる。

8. まとめ

以上のように「月」の描かれ方を中心に見ると、『万葉集』には「月」を「白い」と見る概念はなく、「明るい」「清い」で描かれている。従って『万葉集』ではまだ「白」に共通性を持たせた雪月花の概念は成立していないと言える。とすると家持4134番歌は、「雪」「月」「梅花」が一連のつながりにあるのではなく、「雪」「月」はその明るさの中で「はしき子に贈る

(送る)」という場面設定の道具であり、「梅の花」は贈(送)る事物と見なければならぬ。平安時代になって、漢詩文との関係もあって、雪月花詠が成立し「月」の白さが認識されたと考えられる。

¹ ここで言う「雪月花」詠とは、1首の歌の中にこの3つが詠まれ、それぞれ1~2種を対象として詠まれているものではない。

また万葉時代はすべて白梅とみなしてよく、紅梅は平安時代初期に伝来したものである(沢瀉久孝『万葉集注釈』、伊藤博『万葉集釋注』)。

「花」は平安時代には「桜」が中心となるが、「桜」は春の景物として詠まれるのが一般的であり、冬の象徴としてある「雪」とは冬から春の季節の推移としての意味で組み合わせはあるが、「月」が加わっているものはない。

² 阿蘇瑞枝「万葉集後期季節歌の考察—その表現と場を通して—」(阿

謝辞

本研究はJSPS科研費21K12582の助成を受けたものです。

蘇瑞枝『万葉和歌史論攷』1992.3 笠間書院

³ 芳賀紀雄「家持の雪月梅花を詠む歌」『万葉集における中国文学の受容』2003.10 槇書房 以下芳賀氏の論はこれに拠る。

⁴ 佐藤隆「大伴家持とその意匠—雪月梅花歌の「白」への関心—」『上代文学』123号2019.11

⁵ 佐竹昭広「古代日本語に於ける色名の性格」『国語国文』1955.6 宮地敦子「雪月花の受容」『国語と国文学』1974.8

⁶ 「古代日中文学の同一と差異—「雪」描写とその概念を中心として—」『山口大学教育学部論叢』72巻2023.1

(著者略歴)

吉村 誠 (よしむら まこと)

1977年國學院大卒業、1980年國學院大學大学文学研究科博士課程後期中途退学、博士(文学)、現在山口大学名誉教授